かかみがはら class

資料館だより

Vol. 35

平成29年3月

各務原台地シンポジウム

足元に横たわる『ふるさとの姿』 各務原台地へのまなざし

川島歴史さんぽ

近世から近代へ～近代の川島と学校の概要

館蔵品の和服展～ハレとケの装い～

和服展示の体験から

10m以上の高低差となる各務原台地東縁の崖

各務原市歴史民俗資料館
〒509-0132　岐阜県各務原市鵜沼西町１丁目116番地３（中山道鵜沼宿町屋館内）
TEL/FAX 058(379)5055 URL http://www.city.kakamigahara.lg.jp/rekisi/

足元に横たわる『ふるさと』の姿

～だからか！なるほど！各務原台地～

◇行きは40分、帰りは30分

昨年4月から鵜沼宿の歴史民俗資料館に勤務することになった私は、那加の自宅から鵜沼宿まで、各務原市を横断する自転車通勤を心がけています。距離にして約9㎞、同じ道筋ですが、勤務を終えた帰り道の方がなぜか短時間で、楽。「慣れない仕事から解放された思いでペダルを漕ぐ足取りも軽いからだろうか？」と疑問に思っていました。

本年度、資料館で開催した「各務原台地シンポジウム」とこれに関連する事業に携わる中で、これまで何十年間も各務原で暮らしてきたものの、気付かずにいた「ふるさと」の秘密やあれこれを知りました。自転車通勤の往復での疑問の答えも、台地について学ぶうちに見つけることができました。

◇『東高西低』の各務原台地

それまで台地は「崖で縁取られた周囲より一段高くなっている水平で平らな土地」とイメージしていました。

しかし、「各務原台地」は、西縁の名鉄新加納駅（那加）標高約20ｍ、東縁の羽場駅（鵜沼）標高約60ｍ、なんと約40ｍの高低差があり、台地上は西に向かって低くなっていました。私の自転車通勤は、朝は標高20ｍの自宅から東に向かい約40ｍの上りのハードワーク、夕方は逆に約40ｍの楽な下りという通勤だったのです。

では、どうして各務原台地は水平ではなく、西に向かって低くなっていくのでしょう。台地の東高西低は、台地そのものの成り立ちに秘密がありました。

◇台地を削り出した木曽川の力

やがて地球の気候変動による海水面の低下にともない、古い木曽川も広大で緩やかな流れから、現在の木曽川に似た流れへと変化しました。古い木曽川の川底に堆積した厚い砂の層は、新しい木曽川の流れによって川べりが削られます。「周囲より一段高くなっている」台地とは、実は周りを川の流れが削り取った砂層の残りなのです。

伊木の森展望台（鵜沼）から眺めると、南北にみごとに孤を描く段丘崖が見られ、台地の周囲を「削った」川の流れのパワーを体感できます。

▲通勤途上でも見ることができる木曽川泥流堆積物の露頭（鵜沼西町）

◇木曽川がつくった各務原台地

各務原台地シンポジウムに合わせて開催した「地層・地形探検バスツアー」に随行した私は、各務原台地の姿を体感できるスポットに圧倒されました。

現在とは全く違う何万年も前の各務原の姿を頭に思い描くことは難しいものでしたが、岐阜大学名誉教授の小井土由光先生の分かりやすい解説により、各務原台地の成り立ちを、なんとかおぼろげながらイメージすることができました。

中でも強く印象に残ったのは、大牧団地西（鵜沼大伊木町）の崖で見られる、砂が何層にも重なっている地層です。ここでは、私たちが暮らしている台地の下に土台として存在しているこの砂層を、直接目にすることができます。この砂は、約5～9万年前の木曽川が運び、川底に積もったものという先生の説明にも、現在の木曽川の流れから頭が離れない私は、イメージができませんでした。

東西約9㎞南北2㎞に広がる広大な台地の基になった砂層が木曽川の川底とすれば、当時の木曽川は各務原すべてを飲み込むほどの大河で、しかも当時の水面は、台地上に立っている私たちの頭のはるか上にあったということになります。その途方もないスケール感に圧倒されました。

▲崖面に露出している砂の層

◇大災害の爪痕

バスツアーや台地をめぐるサイクリング事業で訪れた旧中山道（鵜沼西町）沿いの崖面では、大まかに形づくられた各務原台地が見舞われた、大規模な天災の姿を見ることができました。約5万年前、当時の御嶽火山の山体が大規模に崩れ、泥流となって２００㎞以上を流れ下り、台地に覆いかぶさった層があります（木曽川泥流堆積物）。

脳裏をよぎったのは、昭和59年の長野県の大災害。御嶽山の大崩落による土石流が長野県の王滝村を襲いました。これよりも何倍もの規模の土石流が、各務原まで到達していたこと、大災害の爪痕が今も身近に残っていることに驚かされました。

▲各務原台地deサイクリングで伊木山展望台から、台地の段丘崖を見る。（右図：△から円弧状の部分を眺める）

◇何気ない風景の中に

今も私の自転車通勤は続いています。台地上の東西の高低差だけでなく、台地をかつて流れた小河川のつくりだした谷の緩やかな凹凸が、自転車のペダルを通して感じられ、数万年前の風景が頭に浮かびます。

暖かくなったら、シンポジウムの資料集を片手に、見慣れた街をもう一度歩いてみようかと考えています。何万年にも及ぶ「各務原台地」の移り変わりを体感する壮大な「街歩き」が、休日の新しい楽しみに加わりそうです。

（杉山一博）

▲各務原台地シンポジウム資料集

「各務原台地シンポジウム」に合わせて刊行した資料集では、各務原台地の成り立ちの概説や、街歩きにも使えるスポット紹介なども掲載しています。

歴史民俗資料館（鵜沼西町）・市教育委員会文化財課（産業文化センター7階）で販売しています。（５００円）是非ご一読ください。

各務原台地へのまなざし

各務原台地とその周辺の様子は、様々な人々によっていくつかの紀行にまとめられています。シンポジウムに合わせて発行した資料集では収録しきれなかったこうした紀行文を取り上げ、中山道を通行した旅人の視点から見た、各務原台地の往時の風景をうかがって見ることにしましょう。

◇貝原益軒『岐蘇路記（木曽路記）』

貝原益軒（1630～1714）は、福岡藩の儒学者・本草学者です。医学心得である『養生訓』などの著作のほか、旅行を好み、多くの紀行文を残しています。

貞享2年（1685）、益軒は江戸から中山道を通って京へ向かい、この旅の記録を『東路記』に著し、のちに中山道部分を抜粋して『岐蘇路記』として刊行されました。

「鵜沼の西のはづれより西に廣き野有。各務野と云。此邊各務郡なるべし。野の北に各務と云村あり。各務野ひろさ三里四方有と云。但東西は三里ばかり。南北一里半程にみゆる。此野に田畠なし。たゞ青草のみ生ず。野の南に三井山と云山あり。其山の南木曾川のきはまで野有。」

（柳田國男校『紀行文集』博文館　1930）

江戸時代の各務原の様子を紹介するときに最も引用されているのは、この『岐蘇路記』の一節です。「此野に田畠なし。たゞ青草のみ生ず。」から、当時の各務野は、農地に適さず放置された土地という印象を受けますが、周辺の村人たちは、この「青草」を田畑の肥料や牛馬のエサとするための草刈り場として共同利用していました。益軒が通った頃から、各務野に新たな田畑の開発計画がたびたびあったようですが、村人たちはそのたびに「肥料の草を取る場所がなくなる」と反対し、本格的な開発が始まるのは1700年代に入ってからとなります。

▶岐蘇路記の挿絵
中山道沿いの松並木の奥に見える城は犬山城か

◇飯塚正重『藤波の記』

後述する大田南畝は『壬戌紀行』の中で、「藤波記に…」と記事を引用している部分があります。この『藤波の記』の作者が飯塚正重（1629～1670）です。正重は江戸時代初期の旗本で、明暦元年（1655）夏、江戸から大阪へ中山道を通っています。貝原益軒の中山道通行より30年ほど前の記録であり、鵜沼宿が現在の西町・東町に定まったとされる慶安4年（1651）から間もない頃に通った記録として注目され、市域に関しては『岐蘇路記』や、次に紹介する大田南畝の『壬戌紀行』以上に事細かく記されています。

「かゞみが原（此所各務郡の内といへり）。道には松のなみ木あり。此野の西南（道の左）のあいだをみれば、行末に山有ともみえず、ややひろくはれたり。その西のかたに前戸山（ひきくして長き芝山）あり。坪内の何がしがしれる所といへり。東南（道の左）の方にいんき山（芝山）見ゆ。古き城の跡と云。」

上野洋三「紀行『藤波の記』翻刻（下）」『日本文藝研究』59巻3／4号　関西学院大学　2008）

松並木の合間から南西方向を見た正重は、「行く末に山があるようには見えず、とても広く見晴らしが良い」と述べています。「西の方にある前戸山」がどの山を指すのか不明ですが、「坪内某の所領らしい」と続くことから前渡あたりの山と考えられます。また南東の古城跡といわれる「いんき山」は、戦国時代山頂に砦がおかれていた伊木山のことでしょう。

◇大田南畝『壬戌紀行』

大田南畝（1749～1823）は、江戸時代後期の狂歌師・戯作者です。彼は享和2年（1802）、大阪から中山道経由で江戸に向かい『壬戌紀行』にその様子を著しています。

「一里塚をへて新加納村にいたる、人家すくなし。松原を過ぎて右に高き山あり。にゐ山といふ。左右ともにひろき野也。此あたりより鵜沼までの間を各務野といふ。三里四面ありといふ。躑躅所々に花さく。右に二本の松あり。更木新田の立場にいこふ。人家四五戸あり、あんころもち、木ちん（※）、昼たき仕候、などいへる書付を出せり。猶も野をわけゆけば松多し。六軒茶屋の村はわびしきさま也。一里塚をこえて左に芝山ちかくみゆ。藤波記に、のぎ山とていにしへ大福長者のありし、その庭山とかや里人はいへりと書けるは、此山をさせるなるべしと思はる。松原を過て左に高く石ある山あり。あたご山といふ。自是西辻甚太郎支配所、自是東尾州領。」

（柳田國男校『紀行文集』博文館　1930）

南畝が愛宕山のところで見かけた榜示は、おそらく各務村（幕府領）と鵜沼村（尾張藩領）の村境に立てられていたものでしょう。江戸幕府が街道筋を調査した『分間延絵図』にも、村境の各務村側に木製の、鵜沼村側に石製の榜示が並んでいる様子が描かれています。

※木ちん　素泊まり客が自炊するための薪代、またはそのサービスを提供する宿（木賃宿）

▲鵜沼宿に移設された、尾張藩領との境界を示す傍示石

◇近代の旅人が見た各務原

明治以降になると、外国人や詩人、歌人などが各務原近辺を訪れます。明治14年（1881）イギリスの商人アーサー・H・クロウは、岐阜から鵜沼までの道中を「加納で再び中山道に入ったが、道はそこからまったく起伏のない平地を通り、その後、樅や松の若木を植えた荒地を抜けてゆく。クチナシや野生のバラの甘い匂いがわれわれの周りに漂っている。」（岡田章雄・武田万里子訳『クロウ日本内陸紀行』雄松堂書店1984）と記しています。

明治38年（1905）には歌人の長塚節が「淺茅生の各務が原は群れて刈る秣千草眞熊手に掻く」（『長塚節歌集中』青空文庫）と詠んでいます。大勢の村人が肥料や飼料にするための草を刈っている光景が印象的だったのでしょう。各務原には明治12年（1879）に陸軍の大砲演習場が設置されていましたが、彼が通った頃は、大砲の威力増大で周辺の村が危険にさらされるという理由で実弾演習が中止されていた時期であり、江戸時代以来ののどかな各務原が広がっていたのではないかと思われます。

▲市民公園にある長塚節の歌碑

大正6年（1917）に鵜沼村、次いで那加村に飛行場が設置されると、それまで何百年も大きな変化が無かった台地上の景色が、わずか100年で現在の姿へと急速に変化をしていきます。昭和の始め頃に詩人の北原白秋が犬山城から眺めた時には「眼の下の大河を隔てた夕暮富士を越えて、鮮やかな平蕪の中に点々と格納庫の輝くのは各務ヶ原の飛行場である。」（『白帝城』青空文庫）といった景色が広がっていました。

（引地　歩）

近世から近代へ

近代の川島と学校の概要

川島歴史さんぽ

今年度の木曽川文化史料館の講座の一環として、「川島歴史さんぽ～昔を知り今を訪ね未来に伝える～」を行ないました。座学では、近世から近代の川島の行政の変遷と、近代教育の発展の一つとして川島地域に存在した小学校について学び、これをもとに、付近の史跡もあわせて現地探訪を行いました。

各務原市の川島地区は、江戸時代には美濃国葉栗郡の村々で、尾張藩領と旗本坪内氏の領地とが混在していました。村々は、小網島村(尾張藩領と旗本坪内氏領)、坪内氏領松倉島村・松原島村・笠田村、尾張藩領河田島村・小屋場島村・嘉左衛門島(河田島村控)で、現在もその名は継承されていますが、当時は現在のように陸続きではなく各村はそれぞれが一つの島でした。19世紀初頭に尾張藩士の樋口好古によって著された『濃州徇行記』には、江戸時代後半の川島地域の地勢や産業が記されています。

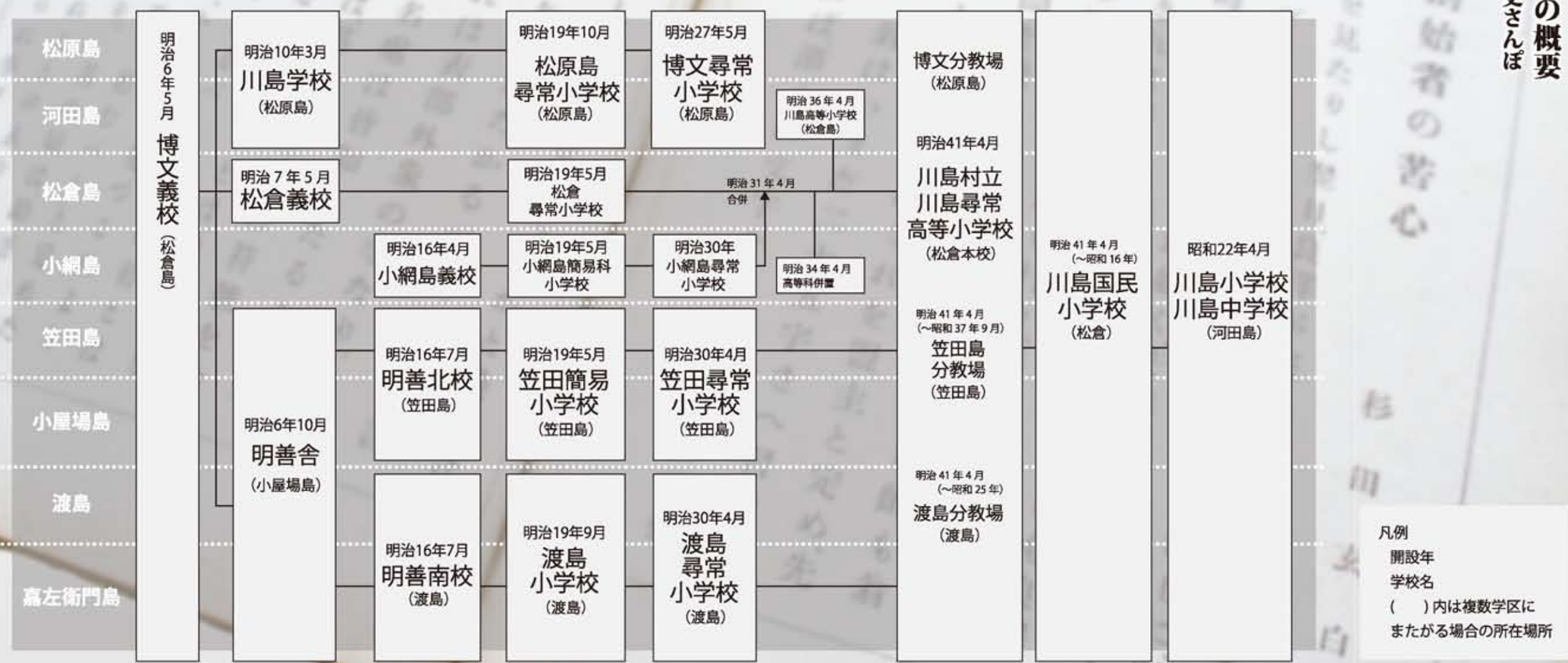
明治時代になり、版籍奉還・廃藩置県の手続きを経て、笠松県と名古屋県の管轄下にあったものが、明治5年(1872)3月川島の全村が岐阜県になりました。そして明治22年7月市制・町村制の施行に伴い村々は合併し、旧村名を大字にして川島村が成立しました(岐阜県羽栗郡川島村)。「旧川島村役場之跡」という石碑が、松原の西養寺前の土地にたっています。明治30年には羽栗郡と中島郡が合併して羽島郡となり、羽島郡川島村になりました。

明治政府は近代化政策の一つとして、学校制度を整備していきました。川島の全村が岐阜県となったのと同じ年である明治五年の八月に学制が発布され、近代学校教育制度の出発点となりました。既に幕末の川島には寺子屋(図1)がありましたが、学制発布の翌年の明治6年5月に、西養寺の一棟を仮校舎として博文義校が設立されました。博文義校跡の石碑が、西養寺境内にあります。

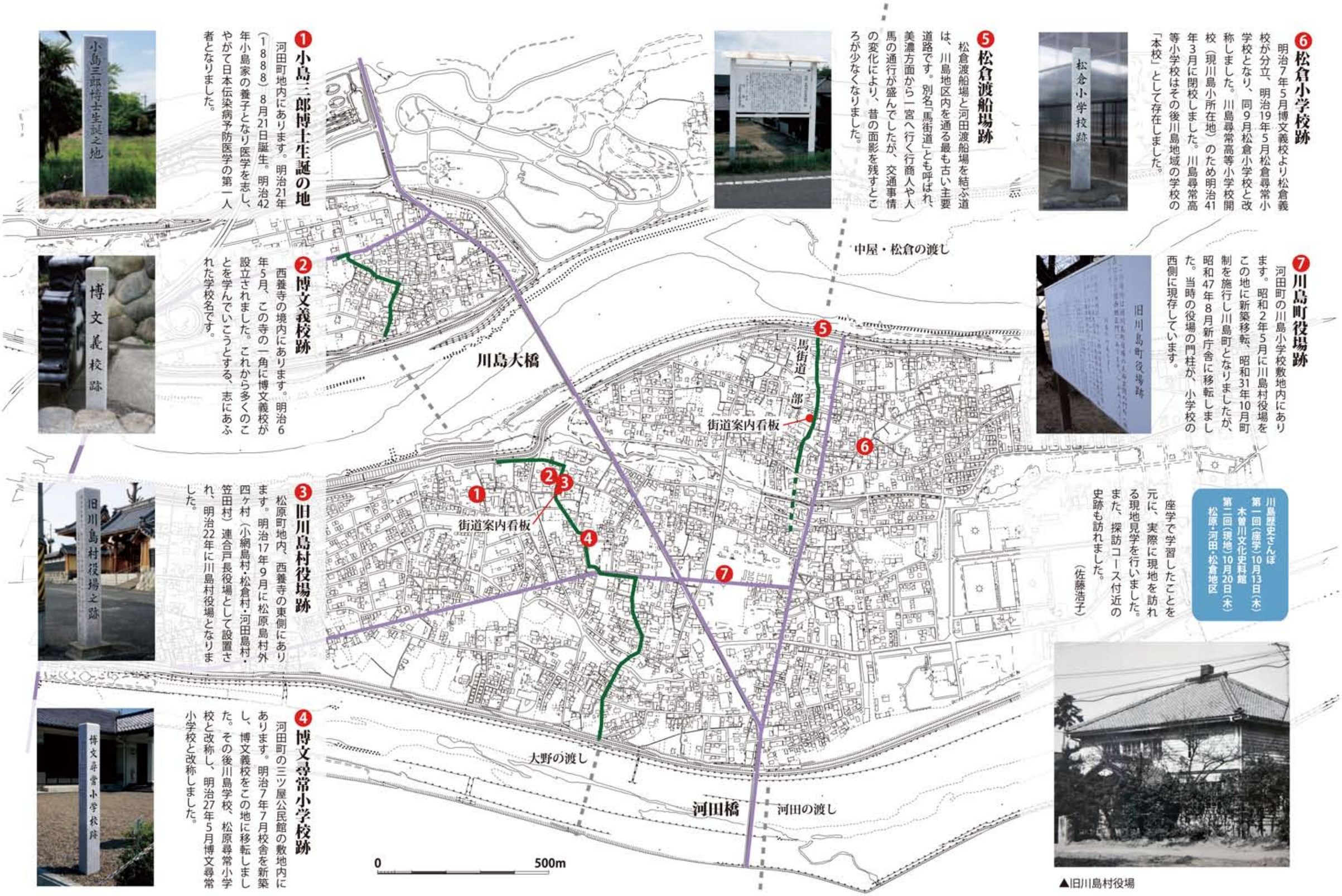
現在川島地区には小・中各一校ですが、当時は島々に小学校が設立され、博文義校跡の石碑をはじめ五つの小学校跡の石碑があります。学校制度も、各地方の実情を考慮し地方の自由を認める教育令から、次第に富国強兵の国家の方針に沿うよう変化していきました。明治13年の改正教育令で小学校三年間の就学が義務化され、明治33年(1900)それまで三年または四年とされていた尋常小学校の修業年限を四年に統一し、将来的に義務教育期間の延長に備え、二年制の高等小学校を併置することが奨励されました。教育制度の変更に伴い川島地区でも小学校に変遷があり、第二次世界大戦中の国民学校を経て、現在ある川島小学校・川島中学校に変わっていきました。(図2)

所在地	期間	生徒数(人)	教師氏名
小網島村	元治元年(1864)～明治6年(1873)	25	苅谷別眼
松倉村	慶応元年(1865)～明治5年(1872)	35	川島静生
河田島村	文久3年(1863)～明治3年(1870)	40	尾関義輔
笠田村	安政2年(1855)～明治5年(1872)	15	永田萬造

▲図1　川島地区に存在した寺子屋



▲図2　川島の小学校変遷図



❶ 小島三郎博士生誕の地

河田町地内にあります。明治21年（1888）8月21日誕生。明治42年小島家の養子となり医学を志し、やがて日本伝染病予防医学の第一人者となりました。

❷ 博文義校跡

西養寺の境内にあります。明治6年5月、この寺の一角に博文義校が設立されました。これから多くのことを学んでいこうとする、志にあふれた学校名です。

❸ 旧川島村役場跡

松原町地内、西養寺の東側にあります。明治17年9月に松原島村外四ヶ村（小網島村・松倉村・河田島村・笠田村）連合戸長役場として設置され、明治22年に川島村役場となりました。

❹ 博文尋常小学校跡

河田町の三ツ屋公民館の敷地内にあります。明治7年7月校舎を新築し、博文義校をこの地に移転しました。その後川島学校、松原尋常小学校と改称し、明治27年5月博文尋常小学校と改称しました。

❺ 松倉渡船場跡

松倉渡船場と河田渡船場を結ぶ道は、川島地区内を通る最も古い主要道路です。別名「馬街道」とも呼ばれ、美濃方面から一宮へ行く行商人や人馬の通行が盛んでしたが、交通事情の変化により、昔の面影を残すところが少なくなりました。

❻ 松倉小学校跡

明治7年5月博文義校より松倉義校が分立、明治19年5月松倉尋常小学校となり、同9月松倉小学校と改称しました。川島尋常高等小学校開校（現川島小所在地）のため明治41年3月に閉校しました。川島尋常高等小学校はその後川島地域の学校の「本校」として存在しました。

❼ 川島町役場跡

河田町の川島小学校敷地内にあります。昭和2年5月に川島村役場をこの地に新築移転、昭和31年10月町制を施行し川島町となりましたが、昭和47年8月新庁舎に移転しました。当時の役場の門柱が、小学校の西側に現存しています。

川島歴史さんぽ
第一回（座学）10月13日（水）
木曽川文化史料館
第二回（現地）10月20日（木）
松原・河田・松倉地区

座学で学習したことを元に、実際に現地を訪れる現地見学を行いました。また、探訪コース付近の史跡も訪れました。

（佐藤浩子）

▲旧川島村役場

和服展示の体験から

館蔵品の和服展
ハレとケの装い

（何かおかしいぞ!?…。）

これまで展示活動で体験してきた、紙魚が食み、ところどころに雨水やネズミのオシッコのシミがついた古ぼけた古文書を相手にした時とは明らかに違う何かの印象をうけました。

暗〜い暗〜い、重苦し〜い、まさに「遺品！」…。防虫材のニオイとともに、元の持ち主のかすかな体臭が混ざり合って展示室に充満していました。

（この部屋には「見えない何か」がこもっている!?…）

明治期から昭和初期の和服類を仮展示した部屋へ休み明けに入った瞬間の偽らざる印象でした。

（果たしてこの展示は喜ばれるのか…。）

大きなとまどいが脳裏をよぎりました。

これまで関わった企画展の四年間をふりかえると、最初の三年間では、古文書の分析をとおして市内の歴史事実を掘り起こしたものを企画展のテーマにしていました。四年目の昨年度は、やや趣向をかえて「学びと教育」をテーマに、「真似ぶから学びへ」と「新しい教育への期待」との、前後二回に分けた独自の切り口による企画展を試みました。

木曽川文化史料館は、旧町規模としてはかなり充実した施設です。けれども人口十四、五万人規模の都市のなかでは、かなり見劣りする小さな展示施設です。一方、館蔵品の中には歴史史料以外の民俗資料も数多く含まれています。常設展示は、まさに木曽川とかかわりの深かった島集落の、生業中心の民俗資料からなっています。

▲喪主用肩衣（浅黄色）

担当者が「見えないものの何か」と対峙するなかで試みた方法は、展示品の一つ一つと妄想会話を始めることでした。

今回の仮展示に一番欠けているものは何なのか、様々な妄想会話を繰り返し試行錯誤するなかで、上記の不気味で重苦しい「負の印象」はどこかへ吹き飛んでしまいました。逆にそれらが「本物の証」として厚みのある情報を閲覧者に伝えてくれることに気づきました。この気づきに至るまで担当者が試行錯誤した内容は次のとおりです。

一　人間の存在を忘れてはいないだろうか。和服は生活のなかで着ていたものであるという原点を見失ってはいないだろうか。呉服屋さんの艶やかな色柄を見せる製品展示とは根本的に違っていてもよいのではないか。

二　着ていた人の職業や階層はどうか、大まかな年齢なども必要に応じて補足説明に加えた方が分りやすいのではないだろうか。

三　持ち主の着物への思いはどうだったのだろうか。どんな時着たのだろうか。（きれいに洗濯し、しわも火熨斗（アイロン）で延ばして束ねてある色とりどりの前掛。たたんだ和服のしつけ糸によるくけ縫など。）

四　どんな場所で着ていたのだろうか。場面がわかる補足資料はないだろうか。

五　余所行きの表情よりも、実情に近い自然な表情の補足資料（写真）はないだろうか。

要するに、展示でいかに史実に近い場面設定や雰囲気を再現できるかにかかっているのです。「見えないものの何か」を忌み嫌うのではなく、展示効果を上げる強力な助っ人として抱き込む方向性は定まったものの、具体的にそれを可能にする小道具はなかなか見つかりませんでした。

▲裏地に派手な色を秘めた普段着

前期展示　7月1日（金）〜9月30日（金）
「普段の日の装い」
後期展示　12月1日（木）〜2月28日（火）
「特別の日の装い」
開催場所　木曽川文化史料館（川島会館4階）第2展示室

担当者自身、山奥の出身で純朴なため、写真に写るときは今でも無意識のうちにかしこまった表情になってしまいます。和服の寄贈者の関係地域から探してみても、役場や学校に関する何かの記念写真は多く見つかりますが、私生活の自然な記録となる写真はなかなか手に入りませんでした。結局、その見通しを達成できるものは、地元資料では間に合わせることができませんでした。やむなく、インターネットで公開されている当時の写真から、実情に合うものを選び出し代用することにしました。

個人情報の問題が過剰な受け止め方で一人歩きしている現状では、個人宅に伝わる写真類を記録保存することは、いろいろ制約もあると思います。しかし今回の企画展の副産物として得た知見は、セピア色に変色した古い時代の写真類、特に普段のしぐさや表情の豊かなスナップ写真の資料的価値の大きさ、重要度でした。

来場者の声

【前期展示】

○地味な日常着でも大事に工夫して着ていたようです。前掛けも、おしゃれ心がわかるように少し広げてみたら、また楽しかったと思います。ずい分前に亡くなったおばあちゃんを思い出しました。（61歳〜64歳・女性）

【後期展示】

○洋装が普及した今の時代、興味深く見ました。（現代は着るものだけでなく、着用の精神が忘れられています。祭りの衣装などの企画もお願いします。（75歳以上、男性）

○着物の色（白と黒）の意味が現在では昔と違っている事に注意がいきました。鏡や小間物は、何か宝物はないかと、おばあちゃんの鏡台の引出しを探した子供時代を思い出させてくれました。あの時の引出しの匂いまで思い出させてくれるようです。黒留袖の花嫁衣裳をみて、最近他界した姑の写真を思い出しました。（61歳〜64歳・女性）

五年目の今年は、これまでの四年間の展示と一線を画し、館蔵品そのものを企画展の展示に生かすべく新たな思いで取り組みました。その矢先にぶつかった壁（とまどい）でした。気づいたその日から暗〜い暗〜い「見えないものの何か」との対決が始まりました。

とは申しましても、担当者はローマ・カトリックのエクソシスト（祈祷師）や密教の高僧ではありません。特殊能力を持たない中で担当者として最大限努力し、展示室にいかに生気を吹き込み、雰囲気を明るくするかが当面の課題になりました。前記の重苦しい、息苦しいまでの印象の原因は何なのか、突き止め克服する必要があります。

▲企画展の様子

今回の企画展をとおして閲覧者が展示物と多くの「心の会話」をしていただけたことを嬉しく思います。これを読まれ、ご家庭で所蔵される古い写真の複写（コピー）に同意をいただける方々からのご一報を心待ちしております。当館の貴重な写真資料として蒐集し、地域の文化や歴史、民俗の再現に活用させていただきたいと考えています。

（上村惠宏）

平成 28 年度の歩み

特別企画『各務原台地シンポジウム』

テーマ	市域の中央部を占め、独自の風土を形成してきた各務原台地をテーマに、市の魅力を再発見する。地形や植生、歴史などさまざまな角度から各務原台地をひもとく。
開催日	平成28年11月20日(日)
内容	基調講演　「各務原台地の生い立ちとわれわれの生活」 小井土由光　岐阜大学名誉教授
	プレゼンテーション 「各務原台地と中山道」 丸山幸太郎　岐阜女子大・地域文化研究所所長 「近代における各務原台地の開発」 鷲見隆司　垂井町立東小校長 「各務原台地とその周辺の里山」 柳沢 直　岐阜県森林文化アカデミー准教授 「遺跡に学ぶ防災」 服部哲也 NPO法人古代遡波の里・文化遺産ネットワーク副理事長
	パネルディスカッション「歴史の舞台、各務原台地」 コーディネーター:小井土由光、パネラー:各講師
関連事業	各務原台地ゼミナール 7月24日(日)　近代史　鷲見隆司 9月4日(日)　考古学　服部哲也 9月25日(日)　近世史　丸山幸太郎 10月22日(日)　植生・植物　柳沢　直 10月30日(日)　地質学　小井土由光
	各務原台地deサイクリング　12月11日(日)
	地層地形探検バスツアー　8月21日(日)　小・中学生対象 9月18日(日)　一般対象 2月12日(日)　一般対象
参加者数	シンポジウム参加者:300人　事業合計:708人

▲各務原台地シンポジウム

企画展

テーマ	館蔵品の和服展ーハレとケの装いー
会場	木曽川文化史料館第２展示室
開催期間	前期「普段の日の装い」　7月1日～9月30日　446人 後期「特別の日の装い」　12月1日～2月28日　328人
内容	幕末明治のころから昭和初期にかけて、日常生活と特別な日に使用された着物、手鏡、小物などを生活写真とともに展示しました。

刊行物

	刊行書籍名
1	各務原市資料調査報告書41号『各務原台地シンポジウム資料集』
2	各務原市資料調査報告書42号『旧中山道鵜沼宿本陣桜井家文書Ⅶ』
3	『資料館だより』第35号

歴史セミナー

248 人

開催日	演題 / 講師
12月3日(土)	「瓦と瓦塔でつながる江南市音楽寺遺跡と各務原の古代」 /愛知県埋蔵文化財センター調査研究主任　永井邦仁
12月24日(土)	「美濃・尾張の古墳文化からみた各務原の古墳」 /南山大学名誉教授　伊藤秋男
1月14日(土)	「川の向こうの遺跡文化」 /一宮市博物館学芸員　藤井雅大
2月25日(土)	「繊維工場の軍事転用～戦時下の尾張一宮と各務原～」 /一宮市尾西歴史民俗資料館学芸員　宮川充史
3月12日(日)	「明治時代に中山道を通った外国人」 /岐阜女子大学文化創造学部教授　山中マーガレット

各種講座事業

子ども将棋教室　20 人

	実施日
1	5月14日(土)
2	5月21日(土)
3	5月28日(土)
4	6月4日(土)
5	6月11日(土)
6	6月18日(土)
7	6月25日(土)
8	7月2日(土)
9	7月9日(土)
10	7月16日(土)

古文書講座　15 人
郷土の古文書を読み解く

	実施日
1	6月8日(水)
2	7月13日(水)
3	8月10日(水)
4	9月14日(水)
5	10月26日(水)
6	11月9日(水)
7	12月14日(水)
8	1月25日(水)

古文書講座　15 人
みんなで地域の古文書を読む会

	実施日
1	6月22日(水)
2	7月27日(水)
3	8月24日(水)
4	9月28日(水)
5	10月26日(水)
6	11月23日(水)
7	1月25日(水)
8	2月22日(水)

学校見学

	開催日	学校 / 講師		
1	4月15日(金)	鵜沼第二小学校6年	炉畑遺跡、鵜沼宿	98人
2	4月21日(木)	鵜沼第一小学校6年	坊の塚古墳、鵜沼宿	106人
3	4月26日(火)	長良西小学校6年	炉畑遺跡、鵜沼宿	120人
4	4月27日(水)	陵南小学校1年	炉畑遺跡、坊の塚古墳	85人
5	4月27日(水)	陵南小学校6年	炉畑遺跡、坊の塚古墳	82人
6	5月13日(金)	稲羽東小学校6年	炉畑遺跡、大牧１号古墳	38人
7	6月2日(木)	山之村小中学校	鵜沼宿	3人
8	6月10日(金)	陵南小学校6年	大牧１号古墳	82人
9	6月22日(水)	川島小学校4年	木曽川文化史料館	117人
10	6月22日(水)	稲羽中学校1年	炉畑遺跡、鵜沼宿	30人
11	6月23日(木)	鵜沼第一小学校2年	鵜沼宿	92人
12	6月27日(月)	鵜沼第三小学校3年	鵜沼宿	81人
13	6月29日(水)	陵南小学校6年	大牧１号古墳	82人
14	6月30日(水)	各務小学校6年	天狗谷遺跡	38人
15	9月3日(土)	中部学院大学	鵜沼宿	30人
16	10月4日(火)	上之保小学校5年	炉畑遺跡	12人
17	10月12日(水)	茜部小学校6年	炉畑遺跡	135人
18	10月26日(水)	川島中学校1年	炉畑遺跡、大牧１号古墳	109人
19	10月28日(金)	生津小学校6年	炉畑遺跡	47人
20	11月16日(水)	鵜沼第三小学校3年	鵜沼宿	79人
21	11月24日(木)	土貴野小学校6年	炉畑遺跡	39人
22	11月25日(金)	鵜沼第三小学校3年	鵜沼宿	79人
23	11月16日(水)	瑞穂市立南小6年	炉畑遺跡	72人
24	1月25日(水)	鵜沼第三小学校3年	鵜沼宿	79人
25	2月8日(水)	鵜沼第三小学校3年	鵜沼宿	79人